

ささめざわいち に  
笹目沢Ⅰ・Ⅱ遺跡  
－七つの墓と謎の大穴群－

嘱託調査研究員 加藤 有花

### 遺跡の位置

笹目沢Ⅰ・Ⅱ遺跡は四街道市成山・中台に所在している。両遺跡の周辺は鹿島川支流の浸食作用によって複雑な地形となっており、南北に形成された支谷の西側が笹目沢Ⅰ遺跡、谷を挟んで東側が笹目沢Ⅱ遺跡である。

両遺跡の北側には、支谷の入り口部に弥生時代中期、古墳時代前期、奈良・平安時代の集落や終末期古墳が発見された郷野遺跡が位置している。その南側に弥生時代後期から古墳時代中期の集落や終末期古墳などが発見された権現堂遺跡、奈良・平安時代の集落と中世の台地整形が発見された浮矢Ⅰ・Ⅱ遺跡、縄文時代中期の環状集落と晩期の粘土採掘坑、そして奈良・平安時代の住居跡が約150軒も発見された南作遺跡などの遺跡が密に分布している。

### 調査の概要と成果

当センターでは国道51号線坂戸交差点の北側に計画された土地区画整理事業に伴い、事業地内に所在する郷野遺跡、権現堂遺跡、浮矢Ⅰ・Ⅱ遺跡、南作遺跡とともに両遺跡の調査を実施した。

笹目沢Ⅰ遺跡については、平成11年度から18年度に3次に亘って発掘調査を行い、奈良・平安時代の住居跡9軒、土坑47基、ピット30基、炭窯4基、溝6条を発見した。笹目沢Ⅱ遺跡については、平成9年度から19年度までに3次に亘る発掘調査を行い、その結果、旧石器時代遺物集中箇所、縄文時代中期の住居跡4軒、炉穴6基、陥穴4基、土坑33基、ピット群、奈良・平安時代の住居跡40軒、方形周溝状遺構7基、溝3条、シシ穴2条、土手2条を発見した。

#### 【縄文時代】

##### ①隅丸長方形の有段住居跡

笹目沢Ⅱ遺跡では、縄文時代中期（阿玉台式期）の土坑墓と思われるものが調査区の北側で、住居跡や土坑が南側でみとめられた。

20号住居跡は、長さ約4.5m、幅約4m、平面形態が隅丸方形で床面の中央が一段掘り下げられた有段住居跡である。この住居跡から東北地方の影響を受けた土器も出土し、他地域との関連がうかがえた。

谷を挟んで北側の南作遺跡では、中期の住居跡が24軒発見され、貯蔵穴・土坑墓・住居跡が環状に配置されていることが明らかになった。南作遺跡では在地の土器のほか、甲信地方の影響を受けた土器などが多数みられた。一方、笹目沢Ⅱ遺跡では住居数は少ないものの東北地方の影響を受けた土器などがみとめられた。これらの系譜が異なる土器は、南作遺跡と笹目沢Ⅱ遺跡との関係だけでなく地域間の文化交流を物語る貴重な資料と思われる。

#### 【古代】

##### ①居住域と墓域

奈良・平安時代においては、笹目沢Ⅱ遺跡の他、南作遺跡と馬込 No.1 遺跡で現在の近隣地域の字名「山梨」と書かれた土器が発見されており、当遺跡周辺が千葉県山梨郷と考えられている。笹目沢Ⅰ・Ⅱ遺跡では縄文時代以降、長期に亘って集落が営まれず、奈良時代に至ってⅠ遺跡に住居跡がみられた。Ⅰ遺跡ではまず東西に5軒並んで住居跡がつくられ、後に奈良時代の後半から平安時代にその周囲に4軒の住居跡が建てられた。5号住居跡は平安時代の住居跡であるが、「山林」「林」と墨で書かれた土器が重なって発見されており、笹目沢Ⅱ遺跡の土器にも共通した文字が記されていた。

奈良時代の半ばから後半には、笹目沢Ⅱ遺跡にも住居が多く営まれた。Ⅱ遺跡では東側に住居跡が多

く、南西側には方形周溝状遺構7基、土坑墓が2基みられる。方形周溝状遺構は、「方形区画墓」「方形墳墓」ともいわれる奈良・平安時代の墓の一形態で、東西に並んで4基、その南側に2基、やや離れた場所で1基発見した。このうち最も大きい7号方形周溝状遺構は、周溝の外側で幅約8m、内側で幅6.5mという規模で、8世紀後半の土器が出土した。4・5号方形周溝状遺構もこの頃の土器が出土し、同時期の墓である可能性がある。住居跡は方形周溝状遺構から離れた場所にあり、居住域と墓域とが明確に区別されていたことが考えられる。

## ②他地域との関わり

笹目沢Ⅰ遺跡では、2号住居跡からアサリやハマグリなど海の貝が出土した。貝殻は合計7kg以上あり、1軒あたりで一度に消費する量とは考えにくく、集落全体の行事で食されたか、祭祀行為に用いられたのではないだろうか。周辺遺跡では南作遺跡や佐倉市の内田端山越遺跡<sup>うちだはやまこし</sup>などでも海の貝が発見されており、内陸部にあたる当地域と沿岸地域との交流がうかがえる。また、Ⅰ遺跡では畿内産の可能性のある甕なども出土しており、入手方法などが注目される。

## ③仏教との関わり

笹目沢Ⅱ遺跡では、調査区の北側に位置する7・8号掘立柱建物跡の柱穴から「寺」と墨書された土器が出土している。この建物の北側、25m程の位置に建てられた22号住居跡では、<sup>たくはつ</sup>托鉢で使われる鉄鉢<sup>てつぱつ</sup>形の土器が出土している。この住居跡の周辺は他に建物がみられず、南作遺跡を臨む台地の先端に孤立して建てられている。この掘立柱建物跡と住居跡は、集落内の小規模な宗教施設に関連する建物やそれに従事した人の住まいであった可能性があるのではないだろうか。

### 【近世】

## ① 約320基のシシ穴群

佐倉市との市境に沿って土手と千鳥状に掘られた194基のシシ穴、その西側にも土手とシシ穴123基が発見された。シシ穴は北から南まで約200mあり、県内有数の規模である。シシ穴とは獣を陥れる穴の

ことで「獣穴」と書き、農耕害獣を駆除するためのもの、または牧や狩りに関連するものと考えられる。

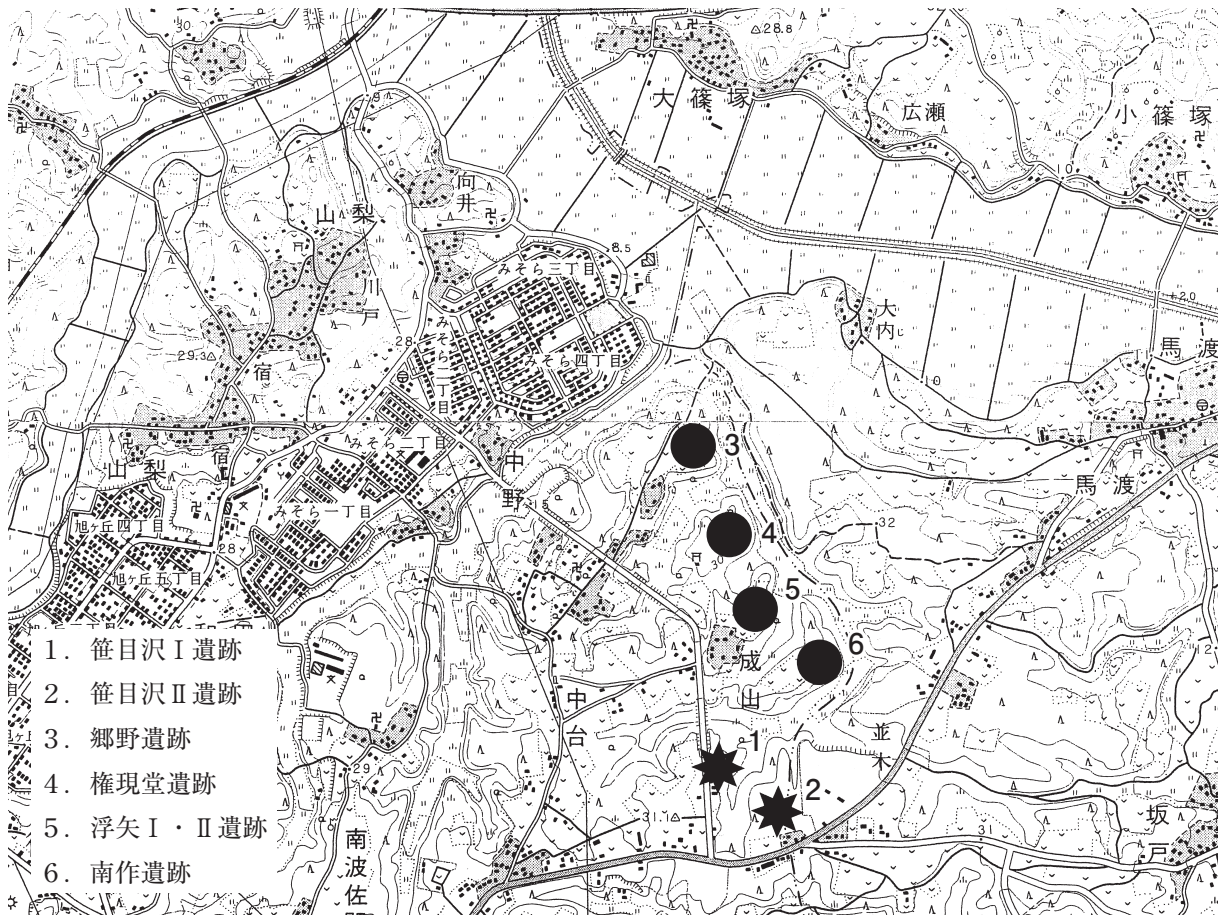
調査の結果、東側のシシ穴は1基あたりの大きさが長さ2.3~3.2m、深さ1.4~1.9mであり、東側の土手とともに18世紀初頭（宝永年間）以前に築かれたものであった。一方、西側のシシ穴は長さ3~3.5m、深さ約3mと大きく、新たに設けられたことが判明した。以前より大きく、そして深いシシ穴が新設されたことは周辺地域にとってシシ穴が重要な施設であったことの証であろう。当遺跡は牧に推定されている範囲ではないが、大規模な施設であることから、なんらかの公的な施設に関連するものではないだろうか。

## まとめにかえて

これまでの調査で、笹目沢Ⅰ・Ⅱ遺跡は奈良・平安時代を中心とする集落跡であることがわかった。それぞれの遺跡で共通した文字が書かれた土器が発見されており、両集落の関連性がうかがえた。また、Ⅱ遺跡では居住域の外側に墓域があることがわかり、古代の墓制を考える上で貴重な例と思われる。

両遺跡が属した山梨郷は、多数の住居跡や掘立柱建物跡が検出された南作遺跡が中核的な集落と考えられ、南作遺跡から出土した「山梨郷長坏 大生部直岡麻」と書かれた土器は、<sup>おおみぶのあた</sup>大生部直が山梨郷の有力者であることをうかがわせる。

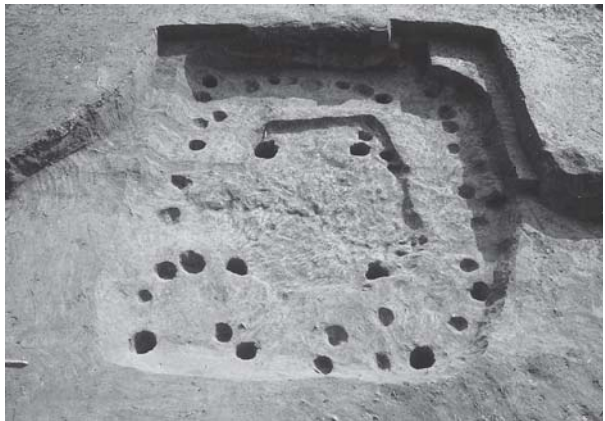
その南作遺跡や権現堂遺跡・郷野遺跡では、墓の可能性のある土坑がみられるが、方形周溝状遺構は確認されておらず、笹目沢Ⅱ遺跡との墓の形態の違いは時期差なのか、身分差をあらわしているのか。後者であるならば、笹目沢Ⅱ遺跡の方形周溝状遺構の被葬者は、山梨郷の有力者の一族ではないだろうか。このことについては、周辺の事例などから今後考えていく必要があるだろう。



第1図 遺跡位置図 (S=1/25,000)



航空写真



笹目沢Ⅱ遺跡 20号住居跡

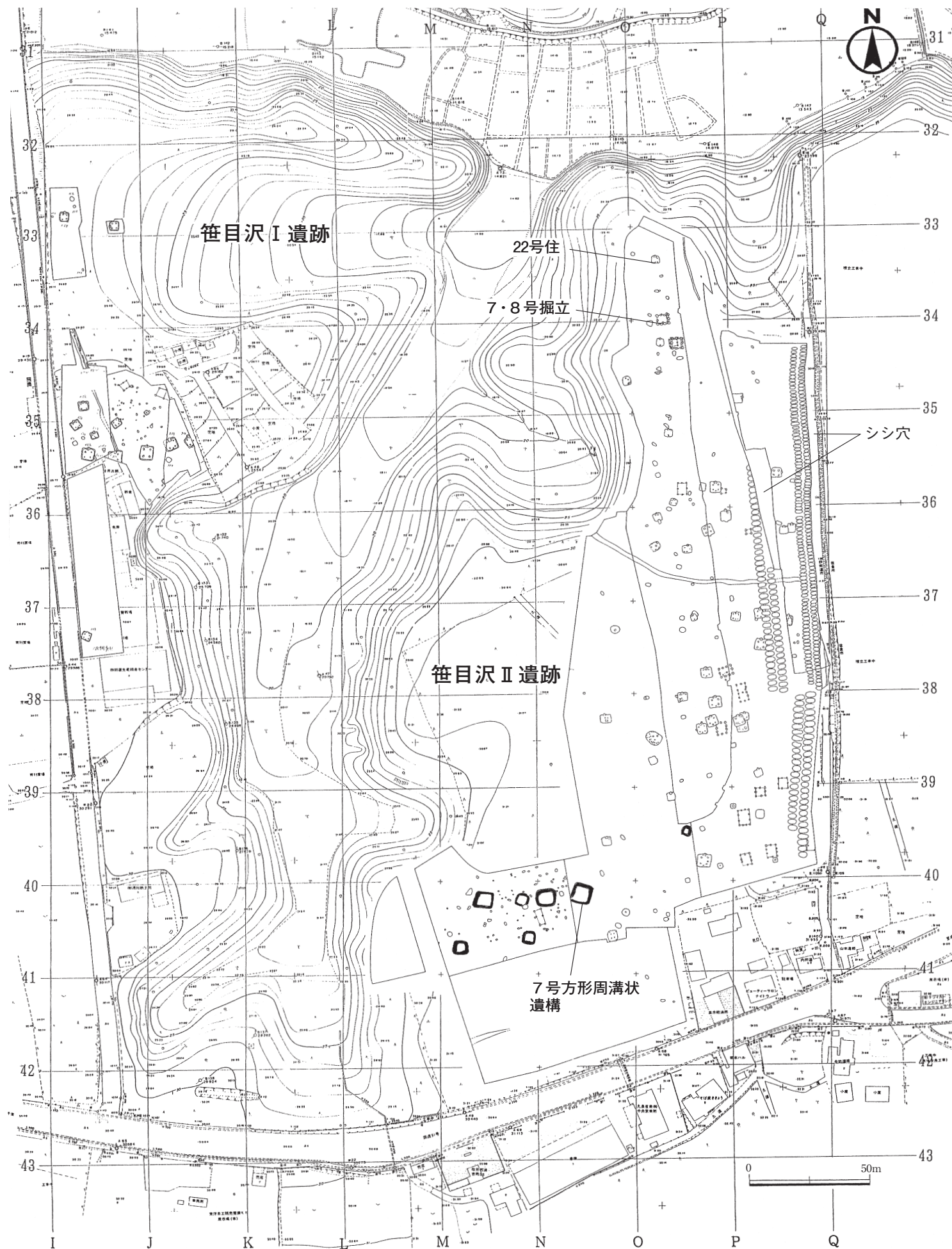


笹目沢Ⅱ遺跡 7号方形周溝状遺構



笹目沢Ⅱ遺跡 シシ穴





第2図 笹目沢 I・II 遺跡全測図 (S=1/2,000)